

インゲイステインクト+Q

第7話 威力強過ぎ

庫発りべるき

〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。
ださい。

〈本編開始〉

二〇一四年十月のある日。

そこはあるアパート。住人である二十六歳の男、すなわち俺が椅子に座って机の上の物を見ている。

難しい表情をしている。

机の上には——二丁の拳銃があった。

そして、それに対応するための銃弾も——

(ふーむ、入手までこぎつけたのはいいが……)

俺は銃を手に入れるために、危ない橋を渡るようなことをしてきた。

バレたら終わりだと思いつつも入手を可能にしてくれる人物との接触までこぎつけ、拳銃の入手に成功した。

俺は「インディステインクト+^{プラスチック}Q」になることを意識していた。

インディステインクト (indistinct)、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。

+Qについては、クエスチョン (question) から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまう要素も含まれるといったことを表すようだ。

すべてがそうというわけではないが、インディステインクト+Qと呼ばれる者の中には、作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。

それも人々の興味を引きやすくなっている。

作業員という表現が適切かどうかわからない形式で、かつ作業員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。

但し本職の作業員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディステインクト+Qと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

俺は過去のインディステインクト+Qにまつわる、いろいろな事件を思い起こしていた。

「工作」に拳銃を使ったケースもあれば、そうでないケースもあった。

俺はカッコつけたかった。世間に壮大なインパクトを与えたかった。

ただ、銃器の扱いについてはお世辞にも上手いとはいえない。おまけに――

拳銃は二丁入手したのだが、そのうちの二丁については弾丸の貫通力が強過ぎる。

標的を貫通した弾がさらに遠くへと飛んで、思わぬところに当たり不本意な事故、最悪、無関係の人を死なせてしまうこともある。

それは避けたい。

あくまでも俺が仕留めるのは標的のみ。

もう一つは小型の拳銃。貫通力は低く、思わぬところに弾が当たる可能性は低くなる。

但し、ちょっととした防壁で弾が止まってしまっているのでそこに気をつける必要がある。

そして机の上には封筒もあった。すでに開かれている。俺は思った。

予定通りだったな。確かに受け取った、と。

俺はある会話を思い出していた。相手は三十歳前後の女性だ。

人目につかないところでの会見となる。

「……本当にこれでいいんですね」

女性は不安そうに俺を見ていた。

「ああ」

封筒の中身を確認しながら俺は答えた。

「それで約束の件ですが……」

「なるべく早く渡す」

俺はその女性にあることを頼んでいた。高額な報酬を約束して――

俺は女性が不安そうな表情になっても無理はないであろうことを頼んだ。高額な報酬を支払ってでも実現してほしいことだった。

そこまではよかったのだが、送る手段を考えなくてはならない。

何らかの物品にさりげなく混ぜて現金を送ろうとするのはマズそうだ。

ここ最近、詐欺を行う奴らが金融機関の振込みを介さずに現金を郵便などで送らせるという手口が多く、関係各所が疑わしい荷物をX線で調べ、必要に応じて警察に通報することになった。

そもそも普通郵便で現金を送ることは違法である。

しかしなるべくこの女性との面会は避けたい。多額の現金を手渡しするのにもなんとなく抵抗がある。

「俺への連絡に必要な電話番号はわかっているな」

「はい」

「ならば連絡してくれ」

さらに俺はこう付け加えた。

「その連絡が終わった後、俺達が連絡を取り合うことは二度とない。その方がお互いのためだ」

俺の言葉に女性がうなずいた。

そして今、自宅にいる俺の携帯電話に着信が入った。

電話に出た俺は相手の声を確認する。あの女性か。

相手はある会社名を口にした。実在しない会社。それは俺との連絡の合言葉だった。ここで俺は、丁寧な口調で相手に語りかける。

「それで、あなたの口座を教えてくださいなのですが……」

これはあの女性に報酬を支払う意思を伝える意味がある。

相手は金融機関の名前と口座を俺に伝えてきた。

「わかりました」

程なくして会話は終了。

俺はある住宅街を歩いていった。

この時間はすっかり暗くなっている。そして人通りの少ないところ。

そろそろ来る頃だな。俺は顔を隠すことができる覆面マスクをかぶる。

やがて一台の車が見えてくる。もう少し近付けば正体がわかる。

——奴か？

その車は近くの家の庭に駐車した。家の中には誰もいないようだ。

運転しているのは——奴だ！

俺が探していた、六十一歳の女。

車から降りたその女は自宅の鍵を開け、中に入ろうとする。

玄関のドアが開いたところで俺は女に近付き、名前を呼んでみる。

すると相手は答えた。

「何よ、あんた」

女は驚きつつも汚いものでも見るかのように俺のほうを見た。俺は隠し持っていた小型の拳銃を取り出し、すぐにその女に近付けた。

「静かにしろ。お前の名前を呼んでみた」

「一体何のために——」

「覚えているよな？」

俺は女の反応を見る。やはり標的の女だったな。

俺は家に飛び込みすぐにドアを閉めて鍵を掛け、小型の拳銃を女に向ける。

銃声が何度か家中に響き渡る。幸いということべきか銃声自体が小さいことと、屋内での発射ということで周囲に聞こえる音量はほどほどで済んだ。

とはいっても周囲に聞こえれば騒ぎになるのは時間の問題である。

俺は強盗を装うため、近くの部屋を適当に荒らしておく。そして速やかにその場を立ち去った。

翌日、俺はネットのニュースサイトを見ていた。

案の定、標的の女のこと報じられていた。

凶器は小型の拳銃と思われる。腹部に一発、頭に三発命中したことが報じられていた。

すでに死亡が確認されている。

俺は目的を達成することができたのだ。

近隣住民によると発砲されたと思われる時間帯に、言い争うような声や爆発音らしきものが聞こえたという。

また家の中が荒らされた形跡もある。警察は現時点では怨恨と強盗の両面で捜査をしていくとのこと。

当分は犯人が俺であることは発覚しないだろうが、それがいつまで続くか――

俺は目的達成を特に喜ぶわけでもなく、しばらくの日数を平穩に過ごす。

それから次の行動に移る。

ある金融機関に向かう。窓口が開いている時間だ。

振込用紙の送り主についての記入欄には、合言葉として使った会社名とその住所を書く。

送り先は頼みごとを聞いてくれたあの女性である。

もし窓口で何か聞かれたら、会社側の不注意で相手に損害を与えたため保証する必要がある、と答えることにしている。

特に何も聞かれなかった。そしてそのまま送金となった。

これで報酬は支払った。あの女性との関係はすべて断ち切った。

やがて事件に関する報道が増えていく。

始末した女はある会社で働いていた。ただ会社の関係者の話によると、同じ職場のいろんな人にトラブルを吹つける癖があったという。

また家族関係についても夫と二人の息子がいるが、夫とは必要最小限度の会話しかしていないし、息子達は別居してから十年以上、今の今まで会話一つ無かったようである。

俺は夫が留守になる時間を考慮したうえであの家周辺で様子をうかがっていた。

俺に始末されたあとに久しぶりの対面、となったわけだな。

家族関係も良くなかったのか。となると、家族や会社関係者が疑われそうだな。

俺については――しばらくは疑われないだろう。

俺が住んでいるところは、女の家からずつと離れたところにある。それも幸いするだろう。

あとは問題の、協力者の女性であるが……

俺は標的の女を始末するために情報を集めていた。頼みごとをした女性のことは、その頃に知った。

俺が始末をした女の情報を提供してくれた女性。万が一のことが起きた場合（というより実際、事件を起こしたのは俺だった）のことを考えて、こう言ったことがあった。

「この女に何が起きてもあんたには何の関係も無い。誰に、何を聞かれても、だ。」

平穩に暮らしたければそのことを忘れないことだ」
女性は金が必要だった。生活のために——
だからこそ俺の要求をのんでくれた。

あれからもう、十二年も経つ。

俺が十四歳、中学二年だった頃、付き合ってた彼女がいた。
ただ、その学年のときに——彼女の生涯は幕を閉じた。

あまりにも突然の出来事だった。

彼女は自分の生涯が閉じる直前、こんな言葉を口にした。

これで楽になれるんだったら、それでいいよ——と。

彼女か死んでからのことだった。

地元の労働基準監督署、警察署、俺達に通っていた中学校、そして——俺の自宅に、手紙が届いたのは。

さらに、亡くなる前の言葉の内容が世間に知れ渡るようになったのも。

各方面への手紙の差出人は——彼女だった。内容はすべて同じ。

この手紙が届いている頃、自分はもうこの世にいないだろう。そのような書き出しで始まっていた。

彼女の母親はシングルマザー。彼女が小学校を卒業する頃とほぼ同時期にその父親、つまり自分の夫と離婚した。

夫婦仲が悪くこのまま一緒にいるよりは、といった感じだったらしい。

そして娘は母親が引き取ることになった。

その後、母親はある職場でパートとして働き始めた。正社員として働こうにも就職先がなかった。

幸い離婚の際、金銭面での話し合いはある程度スムーズに進んだこともあり当面の生活は何とかかなりそうだったが、働いて収入を得る必要はあった。

そこはある会社の工場だった。そして、その工場こそが……

そこにはとんでもない上司がいた。ソイツの役職は課長だった。

部下の些細なミスで不必要に怒鳴り散らすこともあった。それだけではなかった。彼女の母に対してもこんな言動を取ったという。

どう見ても彼女の母が上司である自分の指示に従ったであろう状況であるにも関わらず、うまくいかない彼女の母が悪いと責め立てたこともあったようだ。

他の者に対しても似たり寄ったりの感じだったという。その上、である。

彼女の母に対しては、自分の指示のミスを棚に上げてこう言い放ったという。

これだからシングルマザーは困るんだよ！と——
そして、すでに俺の手で始末された六十一歳の女についてだが……

奴は奴で、彼女の母にツラく当たっているようだったと

いう。

バカな男に引つかかった愚か者——と。

あの女は同じ職場の者達に対して精神的に追い詰めることを快楽としていた——周囲の者達はどのように評している。

もつとも、二人が手を組んでいたわけでは無く、それぞれが独自かつ無関係に彼女の母を、というよりその精神を攻撃していたようだ。

事実、俺が始末した女は問題の上司とは別の部署にいた。さらに二人は、お互いに関わりたくない存在と認識していたという。

二人の共通点と言えば「俺に始末されるべき存在」、まさにこの一言に尽きるだろうな。

多くの人々に害をなす二人。職場で働く人の中には会社側に対して何とかするよう要望したものもいたらしい。

しかし会社側は二人に対してきちんと対応していなかったようだ。

彼女の母親は精神を蝕まれ、やがて……

自分の母親が置かれている労働環境について、何らかの形で彼女の耳に入っていた。

今思うと、俺の前では無理をして明るく振舞っていたのだろうか。俺が見る限りでは、その頃の彼女もいつもと変わらない様子だった。

だが、母親が自分を養うために理不尽な精神的暴力に泣き寝入りに等しい状態で耐えている——このことが彼女の心に重くのしかかっていた。

実際母親は心労から体調不良になることが多くなっていたようだ。

ある日、彼女の母親は言った。

生き続けるより、死んだほうがマシなことってあるのかな、と。

すっかり疲れきった自分の母親に、彼女は答えた。

——お母さんが楽になれるなら、それでいいよ——

そして手紙が届いた時点では、彼女もその母親もすでにこの世には——

おそらく彼女は「その時」が来ればこんな展開になることを予想していたのかもしれない。

というより、母親の助けになると信じて答えたのかも……

最悪の場合を想定していたとも考えられただろう。それもあつて各方面に手紙を——

その後の警察の調べによると、母親は自分の娘の首に手をかけ、彼女が抵抗した形跡もなかったようだ。

彼女の母親は娘の死亡後、後を追うようにすぐに首を吊ったと思われる。

二人とも自宅で遺体となって発見された。

その後、彼女の母親の勤務先は一時的には話題となった。勤務先もさすがにこのときばかりは何かしらの行動を取らざるを得なかったのだろう。一応、というべきか何らかの動きはあったようだ。

騒ぎが大きいときの勤務先の見解は詳細は調査中でコメントできない、といったものだった。

それから数ヶ月後、勤務先に対する世間の関心が薄れていった頃だったと思う。

勤務先の公式発表が各報道機関に対して行われた。

で、内容は、というところ……

上司については指導に行き過ぎたところがあったと言うコメントだけが出された。

その他の人間関係（後に俺が始末したあの女のことだと思われる）については——事実関係を調べるのに時間がかかり、対応が遅れてしまい、結果的に残念なことになった、というものだった。

当時の俺は……どうしてよいかわからなかった。

ただ、むなしさだけが心の中にあった。

もちろん、その会社に対する怒りもあった。しかし当時は、どうしてよいかわからないという気持ちの方が強かった。

そのうち、むなしさを抱えつつも行動を起こすまでには至らず何年もの時が経過していった。

そして今、雨の夜空の下で黒い傘を差した俺は、ある建物を見つめている。

近くもなく、遠くもなく……といった距離。

そしてしばらくすると、空の下から雨が地面に落ちる音の他……

単なる雨の夜というシチュエーションをぶち壊すかのような、ただならぬ大きな音が響いてくる。

次の日の朝、俺が見つめていた建物とその周囲を、ある職種を思わせる服装の人々が調べている。

警察官という職業を、である。

そしてこの日のある新聞の朝刊では、その原因と思われることについて書かれている。

何者かが建物に向けて拳銃を数発発砲されたと思われる、といったところだ。

建物だけでなくその周囲の物にも当たったことも書かれている。

警察は貫通力の強い銃が使用されたとみて捜査すると思う。

そのころ、あるホテルの一室では——

テレビ番組が、銃弾が当たった様子を事細かに報じている。

それを見て、テレビを見ている人物——すなわち俺はこう思った。

なるほど、こんなものか——と。

俺は二つの拳銃を持っている。あの時俺が撃った銃は、貫通力が強いものだった。

標的を貫通した後、どこまで飛んで、どんなことになるのかを試したのである。

但し、じっくり確認しようと建物の内部に入り込むことはおろか、周囲に居続けるわけにもいかない。

すぐに通報されて警察が駆けつけることは容易に想像がつく。

そこで俺はこう考えた。ここまでやらかせば大々的に報道されるであろう。

実際今、こうして報道されている。

そこから威力を推測できる。

それを見た俺が出した結論は——想像以上に貫通力が強い。使うのは極力控えよう。

だが俺は、報道から威力を推測するだけではなく、標的となった建物、というより、その建物の中で働く関係者の反応にも注目していた。

テレビに写っていたのはそこで働く者のコメントだった。インタビュアーに応じた者数人が口々に「怖い」「早く犯人を捕まえてほしい」と語っている。

何らかの事件が発生した場合の、現場周辺の住民や現場に関係する人たちの声をテレビで報道するときによく見られる光景。そんな気がする。

ただ、もしかするとこういういったケースでは、トラブルや怨恨について詳細に発言する者もいるかもしれない。

あの人（またはあの会社など）と〇〇さんとはトラブルがあった。もしかすると——なんて感じで。

しかしそういった発言については、事件発生直後では正確な調べや情報が集まっていないことも多いことを考慮して報道しない、なんてこともあるだろう。

さて、今ニュースで見ている建物だが……

彼女の死から相当年月が経過した。そして俺は就職のときを迎えた。

今回発砲した建物は彼女の母親がらみの工場ではない。しかし、実験台としてはふさわしい建物だった。

就職の時期でも彼女のことを忘れたわけではなかったし、これからも忘れることはないであろう。

しかし、特に行動を起こす予定もなかった。

これからは新しい生活を——そんな思いが強かったものだった。

だが——

残念だが、再び彼女のことを強く思わせる出来事が多発した。

「お前がこんなことするからこうなったんだぞ！」
今でも思う。——俺のせいだよ！と。

そう、この職場は、というよりこの職場も原因をきちんと

と分析しようと思わず安易に他人を責める奴がいたということである。

そいつは男性の先輩だった。イヤな意味で賢かったな。自分を正当化するべく相手の精神を痛めつけてきた。いったいどこでそんな言葉遣いを学んできたのか、今でも問い詰めてやりたくなる。

新入社員の俺が標的になることもしばしばあった。

一方的な思い込みからやりたい放題に俺を悪者にしたこともあったつけない。

そして俺が余計な仕事を膨大に増やされることもたびたびあった。

精神的に参るほどまでに、な。

結局、入社からそんなに時が経たないうちに、俺はその職場を去った。

職場の上司にその男の事を申し入れたこともあったが、それらしい効果も期待できそうになかった。

それからだったと思う。俺が再び彼女の事を意識するようになったのは。もちろん、ダークな意味で。

彼女の母親の場合、これよりさらにヒドイ状況だったようである。しかも自分の娘を養うために、おいそれと仕事を辞められないという点においても、より一層精神的に応えただろうな。

それからの俺は、荒れた生活を送るようになった。生計を立てるために。

いわゆる危険ドラッグを売るようになったのである。ただ、どうしても気がかりなことがあった。

モノがモノだけにどうしても使用者の行動に悪影響を及ぼし、最悪他人に危害を加えてしまう。

だから俺は売る相手には、せめて予め行動への影響を想定してから使ってくれよ、なんて言ったものである。

もちろん車の運転をしなくていいときに使ってほしいとも言っておいた。

こうしてヤバイ物の売人となった俺だったが、それなりによいこともあった。

もちろん収入がそこそこ大きかったこともあったが、この仕事を通じて銃を用意してくれそうな人物と出会えたことが大きな利益だった。

もともと俺は、この仕事を長く続けるつもりはなかった。

とは言え、再就職しようにも正社員、かつ安心して働ける職場に就職できる保障もない。

かといってこんな商売を続けていても、いつかは捕まるかもしれない。

こうなったらいつそのこと、キリのいいところで終わりにして、やりたいことをやってしまいたい。

それが——俺を追い詰めてくれたあの職場と……そして彼女とその母親を奪った工場関係者に相応の復讐をするこどだった。

就職先が安心できるところだったら、生活が安定する。

そうならば、彼女に関する報復も思いつかなかったの
だろうか。

そして、報復を考えた時期もあった、で終わっていたの
であろうか。

もし誰かにそう聞かれたら……どう答えていいかわから
ないな。

とにかく、ヤバイ物を売っているうちにそれなりの知り
合いができて、そのツテで報復用の武器が入ったので
ある。

さらに彼女の母親が勤務していた工場の情報について、
そして俺に協力してくれそうな内部の者——俺が金融機関
の振込みを通じてカネを渡した女性についても、それなり
の知り合いの一部の者が教えてくれた。

多額の報酬をきちんと払えばお前にとってよき協力者に
なりそうだ——俺にそう言ってきたのだ。

実際、俺がすでに始末した女、そして、標的となる当時
の上司の詳細な情報を、女性は提供してくれた。

手に入れた武器についての性能を試すことについてだが
……

ただ単に威力を試すだけなら、もつと目立たない所で試
せばよかった。

俺がいた会社についてはさすがに関係者を殺すのはやり
すぎだが、ある程度の報復を受けてほしいと思っていた。

それが——貫通力の強い銃の実験台として役に立つても

らった、というわけである。

いつまでもホテルの一室で思い出にふけっている場合で
はない。

テレビでは報道されていないだけで俺のことを語った者
だっているかもしれない。

そう思っていると、テレビからこんな音声が届いてき
た。

「この地域では、この建物が銃撃される何日か前に六十
一歳の女性が銃で殺害されており、住民は不安に駆られて
おります」

別に無関係の人には危害を加えないから安心してくれ。
俺は心の中でつぶやいた。

二つの事件についてはそれぞれ別の銃を使っている。弾
を調べればわかるだろうな。

あれこれ考えるのはここまで。次の行動を起こすときだ。
その頃、俺の勤務先だったところでは、いろいろとささ
やかれていた。もちろん、俺の知らないところで。

何人がヒソヒソと話をしている。

——もしかすると、アイツに恨みを持った奴の犯行では
ないのか。

その「アイツ」こそが俺がいた時の、あの男性の先輩だ
った。

ただ、ソイツは社内のあちこちでトラブルを起こしてい

るため、犯人となりうる候補が多すぎて検討もつかない。それが話をしてきた者達の共通の認識だった。

一方、彼女の母親の勤務先だったところでは――

「先日の事件のこともあるし、もしかしたら……例の娘さんのことが関係している可能性も……」

三十代と思われる女性がその場に居た数人に話している。その年齢層は三十代から四十代くらい。

これについても俺の知らないところでの出来事である。

「ずいぶんヒドイことを言われていたあの人のこと？」

彼女の母親のことである。

「だとすると、一体誰が……」

「遺族の誰かのしわざかしら？」

「仮にそうだとすると……十二年経った今、どういう心境の変化で復讐なんか思いついたのかしら」

あのとき彼女の母親の両親（彼女にとっては祖父母）が、自殺の原因は会社での出来事にあるとして会社相手に裁判を起こし、会社側が責任を認め結局和解となった。

しかし彼女の母親の死から和解に至るまで、会社側は従業員や派遣労働者などに対しても、ある種の圧力じみた口止めをおこなっていたようだ。

いろいろな小細工をやらかして、ようやく幕引きにこぎつけた、と言つてもいいだろうな。

そこから離れたところでは、俺に情報提供をしてくれた女性が不安を押し殺そうとする表情をしている――

彼女の母親に関する話題が出ている頃、俺は次の目的地に向けて車を走らせていた。

そして俺は、ネット上で今後想定される出来事について考えていた。

これまでにも「インディスタインクト+Q」と呼ばれる者たちの間では、ネットを使って犯行声明を出すケースも少なくなかった。

俺もブログを使用して、自分の過去の勤務先を銃の性能テストの実験台としたことやその理由、彼女とその母親のこと、記事が公開されている頃には彼女の母親がらみの会社への報復が終わっているだろう事を書いておいた。

時間はそれなりに調整してある。

ただ、自分の勤務先を退職後どんなことをして生計を立てていたかということや、必要な武器や情報をどうやって入手したのかということは秘密のままにしておく。

俺の車が向かうことになるころはある工場だ。

情報提供者の女性の話をもとに推測すると、彼女の母親の上司だった男は、今頃出張先の別の会社の工場に向かっているだろう。

ちなみに彼女の件で、会社との話し合いで課長の役職を外れたという。本人も会社側も落ち着いた状況を望んでいたのも、お互いこれでよかったといった様子だったという。一台の車が走っている。運転しているのは俺の標的であ

る男。何か考えている様子だった。

（先日、あの女が殺された。昔、勝手にくたばったあの母娘と関係があるというのか……）

だとすると、なぜ……今頃になって）

標的の男は自分の言動を省みることなく、彼女とその母親を「勝手に死んで自分に迷惑を掛けた奴ら」としか思っていないようだ。

だが今となっては、それがありがたい。俺にとって倒しがいのある敵だ。

そのころ俺は、目的地となる工場に車で近付いていく。

今回が最後の銃撃となる。これが終われば使用した銃から過去の発砲についても調べられるだろう。

だが今はもう、そこまで考える必要はない。

標的のみを確実に始末する——それだけだ。銃の選択についてでもそれだけ考えればいい。

俺は少し離れたところに車を停める。

双眼鏡で工場の門とその周辺を見てみる。情報によると標的の車が到着するまであと少し。

——見えた！あの車だ！奴が乗っている！！

工場の門に入ろうとしているのか、速度が落ちていく。

俺とは反対車線に位置している。それを確認すると助手席に置いた二丁の拳銃のうちの一つを手を取った。

貫通力が低い、小型のもの。

俺は奴が工場の門に近付くと、すぐさま近付き何発も撃ち込んだ。

相手は驚いたのか運転を誤り、工場の門にぶつかって止まった。

そして——何やらうめき声が聞こえる。

弾が当たったことを思わせる出血をしている。

ただこれで、小型の拳銃の弾を使い果たした。

残っているのは貫通力の強い弾を使う拳銃のみ。

ただ、貫通力のための巻き添えは心配しなくてもよい。発射方法を調整すれば奴が乗ってきた車で弾を止めることができる。

俺は彼女の母親の名前を告げて、静かに、しかしはつきりとこう言った。

「あれだけひでえことをしておきながら、『勝手に死んだ』？よく言うぜ！！」

驚愕に満ち溢れた奴の表情。

「あんた、あの人とどういう関係——」

奴の言葉が終わる前に頭に弾をぶち込んだ。別に俺の正体なんぞ知らなくてもいい。ただ、俺の取った行動の動機だけわからせればいい。

外の騒ぎの正体が気になった大勢の工場関係者達。おそるおそる窓から外を見てみると……

頭から血を流してきたばっている俺の姿が見えた。

そして目撃者達を含めた大勢の人々は後に知ることにな

る。
銃で撃たれて死んだ男の撃たれた理由、そして、男を撃
った俺の正体について――

(終)

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一五年 二月十七日

(C) Kohatsu Riberuki 2015